

国際交流情報交換会

—電子キーボード活用の各国状況—

ロルフ・ブラーゲ、マーク・マンノ、ハン・ヨンヒ、曾 夢、出田敬三、田中功一、柴田 薫、中地雅之、
森 博美**、ウォン・ヘリン：韓国語通訳、増田真意子：中国語通訳、他
司会：阿方 俊（昭和音楽大学） 書記：金銅英二（松本歯科大学）／文責

ザルツブルグ、中国、韓国、台湾そして日本と5カ国から14名が参加した。

まずは、参加者全員で自己紹介を行った。

ザルツブルグで最先端の電子技術を導入したピアノを用いて遠隔地のオーケストラと共演したり、レッスンをしたりしている。前回来日した際に電子キーボードによるオーケストラパートとのピアノコンチェルトを経験したが、今回も非常に楽しみにしている。（ブラーゲ氏）



韓国では電子ピアノを初等教育に導入し、ピアノだけでなく内蔵されている多数の音色も用いている。これにより子供達の音楽への興味が増すのみならず、アンサンブルにも効果を発揮している。電子ピアノの音質の向上に伴い電子ピアノオーケストラアンサンブルを結成し、演奏を展開している。（ハン氏）

台湾ではミュージックラボラトリーのシステムを活用し、多数の学生に鍵盤楽器を通じて音楽教育を行っている。鍵盤楽器のポリフォニックな要素、特にハーモニーの教育に力を入れている。（マーク氏）

中国の上海を中心に演奏ならびに教育活動を展開してきたが、現在は機会を得て日本の昭和音楽大学に留学し、電子オルガン音楽表現の研究をしている。（曾氏）

引き続き日本からの参加者、日本に留学中の学生から自己紹介があった。

その後、各国間での情報交換、質疑応答などが活発に展開された。



続いて司会者から電子オルガンを中心とした電子楽器の世界的な歴史背景について明瞭な解説が行われた。

米国を中心に1930年代以降発展した電子オルガンが1970年代後半より電子技術力の向上から日本にその主軸が移った。さらに拍車がかかった急速且つ高度な発展がしばらく続いた。しかし、1980年代の日本国内での販売台数のピークを境に電子オルガンの販売台数が減少し始めた。減少の一因として次々に変化する電子オルガンの機能とソフト（楽譜）にユーザーがついていけなくなったことが上げられる。現在、中国では電子オルガンや電子楽器の隆盛期を迎えている。特にここ数年の中国国産電子楽器の製造販売が後押し、大きなスケールで発展している。中でも新しい電子楽器と中国古来の音楽文化との融合など注目すべき展開も認められる。中国におけるこれからの電子楽器の普及、活用について、また約40年周期で起こっている電子楽器隆盛の主軸国の移動などについて我々は注視していかなければならない。



生産台数のグラフを示しながらの上記の解説に対して活発な討論や質疑応答が展開された。

予定された時間もあっという間に過ぎ、翌日の第11回全国大会の盛会を国際交流情報交換会の参加者が中心となって作り上げることを約束し、国際交流情報交換会は無事閉幕となった。

